



NEWS LETTER

演劇映像学連携研究拠点

February 2012

Number. 2

「翻訳プロジェクト」始動

翻訳プロジェクトHP

<http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/trans/>

翻訳プロジェクトについて

演劇映像学連携研究拠点では、主に未邦訳の演劇論の翻訳・公開を目的とした「演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開」（通称「翻訳プロジェクト」）を平成22年度より開始した（平成23年度より「テーマ研究」として採択）。このプロジェクトの最大の特長は、国内トップレベルの演劇研究者・批評家の参集によって翻訳作業を行い、成果をウェブサイト上で無償公開することにある。また、翻訳文には各言語の代表者による解題を付録することによって、（研究者のみならず）演劇に関心を寄せる一般読者に対してテキストの背景知識や翻訳の意義などに関する解説を与えている。

contents

■「翻訳プロジェクト」始動	1～3 p
■拠点主催企画レポート	
講演会「ポリショイ・バレエの半世紀 エカテリーナ・マクシモワとヴラジーミル・ワシーリエフの50年」	4 p
国際イブセン演劇祭開催記念シンポジウム「今日の北欧パフォーマンス」	5 p
連続講演会「現代・中東・演劇」	6 p
■平成22（2010）年度テーマ研究・公募研究成果報告	
テーマ研究	7～9 p
公募研究	10～15 p
■平成23（2011）年度の活動	16 p
テーマ研究	
公募研究	
■予告・お知らせ	16 p
公募研究について	

ヨーロッパ世紀末転換期演劇論

平成22年度（研究代表者＝竹本幹夫教授）は、ドイツ語・フランス語・ロシア語・英語の四つの言語において、19世紀末から20世紀初頭にかけて各地域で展開された演劇論（「ヨーロッパ世紀末転換期演劇論」）からテキストを選定した。各言語には翻訳代表者を設け、翻訳を担当する分担者の決定および訳文の精査を委嘱すると同時に、俯瞰的な位置から翻訳の意義を見渡すことができる解題の執筆を依頼。各言語の代表者には谷川道子氏（東京外国語大学名誉教授・ドイツ語）、鴻英良氏（演劇批評家・ロシア語）、内野儀氏（東京大学教授・英語）、藤井慎太郎氏（早稲田大学教授・フランス語）を迎えた。

これらの地域においては、戦間期における演劇文化であれば、翻訳・紹介もかなりの数にのぼる（ドイツのバウハウスや表現主義、フランスを中心としたシュルレアリスム、ロシア・アヴァンギャルド芸術、アメリカにおけるポスト・シンジケートのブロードウェイ演劇など）。しかしながら、この時期の文化が日本語でも活写されているのに対して、この時代を胚胎・始動させた時代の言説の多くは邦訳されることなく現在に至っている。このような翻訳の欠落が近現代日本における知的関心の不均衡を反映しているのだと考えることさえ可能かもしれない。

このような問題意識が言語を越えて共有されることとなり、ゲオルク・ルカーチの『近代戯曲発展史』（1906年）やエドワード・ゴードン・クレイグの『俳優と超人形』（1907年）といった重要文献の翻訳をウェブ上で読むことができるようになったのは、初年度の大きな成果であろう。しかし一方で、新たに対象とすべき言語や地域がまだまだ多いのも事実である。西ヨーロッパでもイタリアやスペインがここには含まれていないし、東ヨーロッパに視野を広げればポーランドやチェコなども無視はできない。このような意味で、翻訳プロジェクトの試みはまだ始まったばかりである。

「翻訳プロジェクト」公開原稿一覧

★印は2012年3月末公開開始予定。

《はじめに》

竹本幹夫「ご挨拶」

鴻英良「翻訳プロジェクトについて」

ヨーロッパ世紀末転換期演劇論

ドイツ

(解説) 谷川道子「ドイツ19世紀末転換期の演劇事情とテキスト解題」

オットー・ブラーム、ゲーアハルト・ハウプトマン「往復書簡」(1889)
(版權の関係上、演劇博物館紀要『演劇研究』第35号に掲載)
訳: 本田雅也

オットー・ブラーム「現代生活のための自由舞台—創刊の辞」(1890)
訳: 本田雅也

ゲーアハルト・ハウプトマン「オットー・ブラームの葬儀に際しての弔辞
(1912年12月1日)」(1912)
訳: 本田雅也

ゲーアハルト・ハウプトマン「ノーベル賞の意義(1912年12月10日、
ストックホルムのノーベル賞晩餐会で行なわれた講演)」
訳: 本田雅也

オットー・ブラーム「自然主義と演劇」(1891)
訳: 本田雅也

マックス・ラインハルト「ラインハルト、自らの芸術について語る(1916
年のインタビュー)」(1916)
訳: 坂巻隆裕

マックス・ラインハルト「『真夏の夜の夢』1905年上演の演出の手引き
から」(1905)
訳: 坂巻隆裕

フーゴ・フォン・ホフマンスタール「ラインハルトの仕事」(1928)
訳: 坂巻隆裕

ゲオルグ・ルカーチ「近代戯曲の発展史」(1911、抄訳)
訳: 谷川道子

英米

(解説) 内野儀「英米の世紀末転換期から1930年代までの演劇と演劇論」

ウィリアム・アーチャー「ほんとうのイブセン」(1901)
訳: 内野儀

エドワード・ゴードン・クレイグ「俳優と超人形」(1907)
訳: 内野儀

ガートルード・スタイン「さまざまな劇」(1935)
訳: 小澤英実

フランス

(解説) 藤井慎太郎「フランス語圏の演劇論」

★ モーリス・メーテルラン「小話—演劇について—」(1890)
訳: 穴澤万里子

アドルフ・アッピア「ドラマと演出の将来」(1918-1919)
訳: 田中晴子

アドルフ・アッピア「リトミック体操と演劇」(1911)
訳: 田中晴子

アンドレ・アントワヌ(編)「自由劇場(抄訳)」(1890)
訳: 横山義志

アンドレ・アントワヌ「演出についてのおしゃべり」(1903)
訳: 横山義志

アンドレ・アントワヌ「現代の俳優術」(1924)
訳: 横山義志

ジャック・コボー「ドラマの革新の試み」(1903)
訳: 田中晴子

モーリス・ボトウシェール「人民劇場」(1899)
訳: 田中晴子

民衆劇場創設委員会「公教育・美術大臣への手紙」(1889)
訳: 田中晴子

フィルマン・ジェミエ「明日の演劇とシェイクスピア協会」(1917)
訳: 田中晴子

ロシア

(解説) 鴻英良「二十世紀ロシア芸術の曙」

レオニード・アンドレーエフ「『野鴨』」(1901)
訳: 塚原孝

ヴァレリー・ブリュソフ「不必要な真実
(モスクワ芸術座について)」(1902)
訳: 平松潤奈

ヴァチスラフ・イワノフ「予感と予兆
新たな有機的時代と未来の演劇」(1906)
訳: 鴻英良

アレクサンドル・ブローク「ヘンリック・イブセン」(1908)
訳: 岩崎理恵

アンドレイ・ペールイ「演劇と現代のドラマ」(1908)
訳: 八木君人

レオニード・サバネーエフ「音と色彩の相関関係について」(1911)
訳: 梅津紀雄

チャールズ・S.マイヤーズ「共感覚の2つの事例」(1914)
訳: 梅津紀雄

各国現代演劇論(ラテンアメリカ編)

★(解説) 里見実「中南米演劇 解題のためのノート」

メキシコ

ルイス・バルデス「エル・テアトロ・カンペシーノ—
その発端」(1966)
訳: 里見実

アニック・トゥルゲール「チカーノ演劇イパニックの
伝統と「アクト」の革新」(1991)
訳: 里見実

★ ドナルド・H・フリッシュマン「現代マヤ演劇と民族紛争
—歴史の再発見と再解釈」(1995)
訳: 里見実

ペルー

ミゲル・ルビオ「アンデスの人々との出会い」(1983)
訳: 里見実

★ ミゲル・ルビオ・サバタ「北京オペラ(京劇)について
のノートと考察」(1995)
訳: 里見実

コロンビア

★ エンリケ・フェナベントウーラ「コロンビアの新しい演劇」(1979)
訳: 里見実

★ エンリケ・フェナベントウーラ「文化と政治」(1987)
訳: 里見実

ブラジル

★ アウグスト・ボアル「演劇を通して何かを言いたい俳優と
俳優のための200のエクササイズとゲーム」(1988)
訳: 里見実

各国現代演劇論(中国編)

★ 焦隱菊「演出の芸術創造」(1951)
訳: 瀬戸宏

★ 傅謹「東洋芸術のアイデンティティ—梅蘭芳訪米公演の文化的解釈」(2007)
訳: 平林宣和

今後の展望——演劇における1938年問題

翻訳プロジェクトでは、平成23年度（研究代表者＝秋葉裕一教授）より右記のチームを再編成して新しい研究会が発足することになった。第1回目の研究会（「演劇における1938年問題——翻訳プロジェクトの新たな展開に向けて」）が7月上旬に開催され、鴻英良氏、内野儀氏、秋葉裕一氏による報告をもとに全体で討議を行った（2011年7月4日、早稲田大学演劇博物館レクチャールーム）。この研究会は平成24年度以降の翻訳テキスト選定に向けて、谷川氏の発案によって設定されたテーマであり、鴻氏が研究会の代表を務める。〈1938年〉という時期に起こりつつあった「潜在的变化」を総合的に把握することを目指す試みである。

この問題設定の背景を理解するための参考書のひとつは、2003年度に21世紀COE演劇研究センター主催により行われた谷川氏の連続講演である（岡室美奈子編『知の劇場、演劇の知』に「ドイツ演劇の現在——ポストドラマ演劇とハイナー・ミュラーの位相」として所収）。谷川氏はこのなかで〈1968年〉、〈1977年〉、〈1990年〉という歴史的な時間軸における「分水嶺」を作業仮説として設定しながら20世紀後半の演劇史の再考を図っているが、本研究会では前年度の「世紀末転換期演劇論」とも関連しつつ〈1938年〉という年号に象徴されるさまざまな事件・出来事を中心に演劇史を読み直す。

もうひとつの参考書は、谷川氏によって書かれた「今日の『ユリシイズ』——ペーター・ヴァイスの小説『抵抗の美学』のために」（『新日本文学』、1985年9月号）である。この断章的な論文は、架空の自伝小説という形式で1937年から45年までの「抵抗の物語」を描いたペーター・ヴァイスの遺作『抵抗の美学』（1975年～81年）を参照点として、その眩暈がするような言語態に「芸術的想像力と政治的想像力と歴史的想像力が、その彼方で三位一体となるためのひとつの真摯な試み」を読みとろうとする試みである。1930年代という緊迫した政治状況において、ひとりの人間に何ができるのかという想像的な問いは、原発問題が露呈した3月以降の日本においてもなお有効であるように思われる。

第1回の研究会に谷川氏の参加は叶わなかったが、秋葉氏が「日本におけるプレヒト受容」という視座からベルトルト・ブレヒトの『第三帝国の恐怖と悲惨』や『ガリレイの生涯』（ともに1938年に創作）の意義について、内野氏が南米戦争後のアメリカ史の概

略をふまえつつ、ニューディール政策の一環として行われた「フェデラル・シアター・プロジェクト」（1935年～39年）やソートン・ワイルダー『わが町』（1938年初演）について、鴻氏がメイエルホリド劇場を閉鎖（1938年）に追い込んだケルジェンツェフの論文およびメイエルホリドの弁明についてそれぞれ報告を行い、その後の討議では主としてこの時期の「権力による抑圧の形式」と「抑圧に抵抗する形式」の質的变化について議論が交わされることとなった。

ウェブ刊行記念シンポジウム

演劇映像学連携研究拠点では、後述の「テーマ研究」と「公募研究」に加えて、外部の演劇関連団体との連携を図って講演会・シンポジウムを主催している。2011年度は日本演劇学会と共催で、毎年秋季に開催されてきた「秋の研究集会」を早稲田大学で開催する運びとなった（2011年12月3日（土）・4日（日）、実行委員長＝秋葉裕一教授）。

そして、翻訳プロジェクト初年度の翻訳成果をめぐるシンポジウム「ヨーロッパ19世紀末転換期演劇論——演劇映像学連携研究拠点『翻訳プロジェクト』をめぐる」が、「秋の研究集会」のオープニングを飾ることとなった。パネリストには、初年度の翻訳代表者を務めた谷川道子氏、鴻英良氏、内野儀氏、藤井慎太郎氏を迎え、司会は2011年度の研究代表者である秋葉裕一演劇博物館副館長が務めた。プロジェクトの活動を日本演劇学会員に対して報告するとともに、プロジェクト全体が目指すべき方向性について、討議が行われた。

シンポジウムの最後には、このようなプロジェクトは学部学生に対して文献を案内するうえでも非常に有用なものであるとご賛同を頂いた一方、プロジェクトに新しい企画を持ち込む際の手順、あるいは論文に引用する際の方法など、利用環境を早急に整備する必要があるという指摘も受けた。また具体的に、19世紀末に限らずとも、17世紀のフランス古典主義時代や、18世紀の啓蒙主義時代における国際的な文化交流に関する研究など、「翻訳プロジェクト」の対象となる領域は決して少なくないというご意見も頂いた。

以上の指摘を受け、2012年度以降におけるプロジェクトでは、さらなる発展が期待される。（堀切克洋）



内野儀氏、鴻英良氏（7月4日）



シンポジウム風景（12月3日）

講演会「ボリショイ・バレエの半世紀 エカテリーナ・マクシモワとヴラジーミル・ワシーリエフの50年」

去る2011年7月12日午後2時45分より、早稲田大学小野記念講堂にて、演劇映像学連携研究拠点主催、ロシア文化フェスティバル組織委員会共催の講演会「ボリショイ・バレエの半世紀 エカテリーナ・マクシモワとヴラジーミル・ワシーリエフの50年」が開催された。この講演会は、ロシア・バレエ史においてきわめて重要な役割を果たすボリショイ・バレエ団の歴史のなかで、史上最高カップルともいわれるエカテリーナ・マクシモワとヴラジーミル・ワシーリエフの舞台活動50年を記念して企画されたものである。

講師には、両者と関わりが深いニコライ・フォードロフ氏（元ボリショイ劇場プリンシパルダンサー、バレエ教師）と斎藤友佳理氏（東京バレエ団プリマバレリーナ）のご夫婦をお招きした。講師のお二人は、マクシモワおよびワシーリエフとのあいだの深い親交を思わせるエピソードを交えながら、20世紀のロシア・バレエにおいてマクシモワおよびワシーリエフが果たした重要性についてお話しになった。講演会は、平日の昼間という時間帯にもかかわらず、70名近くの聴衆をお迎えすることができた。

まずはフォードロフ氏より、ヴラジーミル・ワシーリエフについてのお話があった。1960年代にバレエアカデミーで学び、70年代からボリショイ・バレエでの活動を始めたフォードロフ氏にとって、大スターであったワシーリエフはまさに憧れの存在であり、舞台を共にすることに誇りを感じていたという。ボリショイ・バレエ史全体でいえば、ワシーリエフは、男性的・英雄的な踊りを導入したアレクセイ・エルモラーエフに学び、その後、ユリー・グリゴローヴィチの振付によって、その才能を存分に発揮した。（グリゴローヴィチ振付による「スパルタクス」は、ボリショイ全体に衝撃を与えたともいう。）フォードロフ氏によれば、ワシーリエフのダンス（ひいてはボリショイ・バレエ黄金期）の魅力は、たった一秒の踊りのために30分が費やされるような濃密な作業のもとで可能となる、「魂の反映」としてのバレエにあった（内面と肉体との有機的な連帯の重要性は、その後何度も強調された）。

ワシーリエフは振付家としての活躍も目覚ましく、71年からのその活動は、グリゴローヴィチをして「ボリショイに新たな踊りが生まれた」と言わしめるほどのものであった。ボリショイはその後

グリゴローヴィチの一頭体制から変化し、グリゴローヴィチ、マイヤ・プリセツカヤ、そしてワシーリエフという3人の振付家のグループを中心に、活動の場を世界的に広げていった。

2009年の急逝が惜しまれるエカテリーナ・マクシモワについては、主に斎藤氏から話があった。小さな頃からマクシモワとワシーリエフのダンスの写真に魅入られていた斎藤氏は、ボリショイの団員となったことは一度もないものの、例外的に継続したレッスンへの参加を認められ、その過程のなかでマクシモワとの親交を深めていったという。

斎藤氏の講演を簡単に要約すれば、「クラシック・バレエの教科書」とよばれるほどに美しく均整のとれたマクシモワの踊りは、美の飽くなき求道者としての態度から生まれたということになるであろう。彼女に天賦の才があったのはもちろんだが、舞台上で足を美しく見せるため、2センチ小さなトゥシューズを使っていたことなどをはじめとする、生涯にわたる過酷な努力とバレエに対する真摯な態度こそがマクシモワのバレリーナとしての成功の要因だったということである。

引退後の教師としてのキャリアも同様の哲学に貫かれていた。バレエ学校の校長の座に就くことが可能であったにも関わらず、ガリーナ・ウラノワをはじめとする多くの師に学んだことを少数の教え子にマンツーマンで教える道を選んだマクシモワは、晩年には歩くこともままならぬほどの障害を足に抱えながらも、厳選した教え子に同行し、休暇もほとんどとらずに指導を続けていたという。

公私にわたるパートナーであったマクシモワとワシーリエフは、情熱を内に秘め物静かなタイプのマクシモワと開放的で人懐っこいワシーリエフというように正反対の性格であったのだが、それよりも大きな共通点を持っていたと――バレエを愛し、友人たちを愛し、自然を愛するという、舞台上に留まらない、あらゆるものへの「愛」である。二人の豊かな内面性と純粋な心こそが、ロシア・バレエ史上最高のペアへと彼らを成長させていったということだ。

講演は「愛」という言葉で締められることとなったわけだが、これはおそらく陳腐でも通俗的でもまったくない。豊かな内面性と肉体へのその伝達がボリショイ・バレエの真髄であるということが講演を通じて何度も言われていた。彼らの踊りは、芸術活動のみならず実生活においても強く感じられた二人の「愛」ある態度、それが直結してこそ、特別なものとなったのだ。

ボリショイ・バレエの黄金期を支えたのが、ダンサーの身体と精神との一致・調和であったとするならば、映像上映を交えつつマクシモワとワシーリエフの人柄についてお話しただけたこの機会は、まさにロシア・バレエの真髄を身をもって理解できる場だったといえるだろう。講演会の最後には、講演中にも話題にのぼったマクシモワのトゥシューズと多芸なワシーリエフ作の絵画の寄贈の申し出があり、フォードロフ氏から竹本幹夫演劇博物館館長へと手渡された。貴重なお話をしていただけたこともあわせて、講師のお二人に改めて御礼申し上げたい。（土居伸彰）



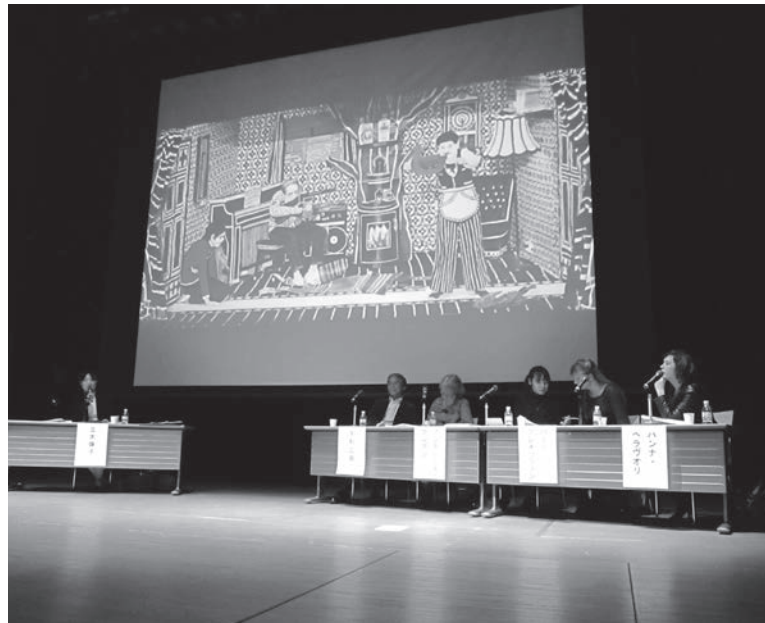
ワシーリエフ氏の講演は実演も交えたものだった

国際シンポジウム 「今日の北欧パフォーミングアーツ」

演劇博物館では、2006年にイブセン没後100年を記念して「日本におけるイブセン受容の歴史」展が開催されているが、2000年代の日本の演劇において、イブセンは「忘れられた」とは言わないまでも、「昔の」「古くさい」劇作家であると見なされている感がある。それはこの劇作家に明治・大正期のヨーロッパ演劇受容の記憶がこびりついているからにはほかならない。アーカイブとしての演劇博物館の役割は、それを過去の遺物として展示的に提示するだけではなく、つねにその記憶を問い直して、現在的な意味を捉え直していくことにある。その点で、今回の国際シンポジウムは2006年の本館展示と連動しながら、北欧演劇研究におけるひとつの「うねり」をつくりだしたことになるのかもしれない。

このような動きの背景には、イブセンが「読み直すに値する劇作家である」という同時代的な認識がある。〈古典の読み直し〉を卓抜な解釈と空間構成によって提示するいわゆる演出演劇（レジーテーター）は、〈映像の世紀〉と並んで〈演出の世紀〉であるといわれた20世紀が終わってもなお、〈言葉の演劇〉という文化が根強いヨーロッパの国々（とりわけ17世紀古典主義演劇の伝統をもつフランス、あるいは一八世紀にそれを引き受けたドイツ）では舞台芸術の方法論的主流を占めているが、ここ最近になって、イブセンを取りあげる演出家が各国で目立ちはじめている。1991年から国際イブセンフェスティバルを開催しているノルウェー国立劇場も一役買っているのだらうし、演出家（ドイツのオスターマイアー、フランスのブランシュヴァイクなど）の側もまた主体的にイブセンを読んでいるという事実も指摘できよう。

2010年秋から、東京でも「国際イブセン演劇祭」が開催され、ノルウェー国立劇場の『人民の敵』、ベトナム青年劇場の『人形の家』、ドイツ座の『野がも』、名取事務所の『復活の日』（『私たち死んだものが目覚めたら』の翻案）が連続上演されたが、演劇映像学連携研究拠点では、この演劇祭を記念してシンポジウム「今日の北欧パフォーミングアーツ」（2010年11月22日（火）、23日（水）、早稲田大学小野記念講堂）を開催することとなった。NPO



パネル討論「今日の北欧の舞台表現をめぐる」

舞台21との共催企画である。

パネル討論「現代のイブセン上演をめぐる」のなかでは、ドイツ座の演出家ミヒャエル・タールハイマー氏と、ベトナム青年劇場の演出家レ・フン氏、ノルウェー国立劇場イブセン演劇祭のディレクターを務めるバ・クレメツェン氏らが、日本の演劇評論家3名（扇田昭彦氏、七字英輔氏、みなもとごろう氏）と顔を合わせ、イブセンという劇作家の現代性をめぐって議論が交わされた。イブセンの流行の背景には、戯曲が印刷されるというメディア的変化があり、それゆえに今日の舞台芸術においてもイブセンは「読む」対象となりうるのである。

もうひとつのパネル討論「今日の北欧の舞台表現をめぐる」のほうでは、バ・クレメツェン氏のほか、フィンランド演劇センター所長を務めるハンナ・ヘラヴオリ氏、デンマーク・オーフス大学のアンネリース・クルマン氏、バレエから舞踏まで幅広いダンス評論を手がける立木燐子氏、『復活の日』の演出を担当した毛利三彌成城大学名誉教授らによって、演劇だけではなく、ダンスやインスタレーションなどまで含めた北欧の舞台芸術の現在について話し合われた。

演劇分野では、スウェーデンの国民的な劇作家であるラーシュ・ノーレン（1944ー）や、日本でもしばしば上演される機会のあるノルウェーの劇作家ヨン・フォッセ（1959ー）、あるいはフィンランドで最も有名な演出家クリスチャン・スメーズ（1970ー）などの名前が挙がった。ダンス分野では、同じくフィンランドのダンサーで、代表作である『HUNT』が2002年に新宿でも上演されたテロ・サーリネン（1964ー）、パフォーマンスの分野では、デンマークのホテル・プロファーマなどの映像がスクリーンに映し出され、聴衆の関心を誘っていた。（堀切克洋）



講演する毛利三彌氏

連続講演会 「現代・中東・演劇」

〈北欧〉と同様に、〈中東〉もまた演劇博物館における資料的蓄積が決して多いとはいえない地域だが、国際演劇協会が2009年末から開催している「紛争地域から生まれた演劇」のために来日した二名の演劇人（ターヘル・ナジーブ氏、ターレク・アブル=フェトーフ氏）を早稲田大学に迎え、連続講演会を2日間にわたって開催することができた。両日ともに、レバノン演劇の字幕翻訳なども手がける現代アラブ文学研究者の鶴戸聡氏（日本学術振興会特別研究員）をモデレーターに迎え、中東地域の舞台芸術の現在を窺い知ることのできる貴重な講演会となった（2010年12月17日、21日 早稲田大学120-4号館）。

第1回の講師はパレスチナ国籍イスラエル在住の俳優・劇作家であるターヘル・ナジーブ氏（1970-）。「イスラエル/パレスチナにおける上演」というテーマで、主にパレスチナ演劇の歴史と特徴、そして自身の演劇活動について語っていただいた（17日）。パレスチナ演劇の黎明期は1970年代だが、ナジーブ氏曰く、この時期において圧倒的に重要なのは、純然たるインプロヴィゼーションを通じて演劇がつくられていったという点だ。そのため、現在に至るまでパレスチナの演劇においては俳優の役割がきわめて大きいという特徴がある。

たとえば、これまでに3度の来日公演を行っているアルカサバ劇場においても、演出家ニザール・ズビの指導の下で、即興はきわめて有効な方法論となっている。「パレスチナ人俳優の問題とは何か。それは彼らが規律というものを嫌っていることです。他人の指示に従うことを嫌っている困った連中だらけなのです。たとえば『ハムレット』のなかでも平気で即興をやってしまう。しかしそれは、わたしたちの血のなかにそれが浸み込んでいるからなのです。そしてそれは、わたしたちの日々の生活がインプロヴィゼーションの連続だからなのです」（ナジーブ氏）。

第2回の講師は、演劇プロデューサーのターレク・アブル=フェトーフ氏。アブル=フェトーフ氏には、「現代中東地域におけるフェスティバル」という題目で、出身地であるエジプトの演劇の歴史



ターレク・アブル=フェトーフ氏

を下敷きにしなが、彼がキュレーターを務めていた中東地域のフェスティバル〈ミーティング・ポイント〉がもっている意味や有効性について、語っていただいた。アラブ地域では、国家的独立を勝ち取った1950年代以降（エジプト共和国の成立は1953年）、芸術家は社会主義的体制に包摂される運命をたどったが、ヨーロッパの文化機関からの助成という「第三の道」が拓かれていった1990年代から、国家とはインディペンデントな支援機関が設立されるようになっていった。アブル=フェトーフ氏などが中心となって2002年にブリュッセルを拠点に設立された〈ヤング・シアター・アラブ・ファンド〉もそのひとつである。

この団体によってビエンナーレとして開催されているフェスティバル〈ミーティング・ポイント〉は、芸術家どうしを「つなぐ」場でもありつつ、同時に都市どうしを「つなぐ」機会にもなっているのが大きな特徴だ（この演劇祭は、2005年に七都市、2007年には十一都市で開催されている）。「実は、この地域はとても狭いところなんです。ダマスカスの都市部からバイルートまで車で2時間くらいですし、ダマスカスからアンマンまでが3時間くらいです」。「そのためには、各地でパートナーを見つけて連携していく必要があります。キュレーションとは、約30演目のプログラムをつくった後で、各地のさまざまな知的状況や言論の自由度などを考慮に入れながら調整をしていくことなのです」（アブル=フェトーフ氏）。このような考え方は、現代日本におけるフェスティバルや文化政策のあり方に一石を投じるような視点ではないだろうか。（堀切克洋）



鶴戸聡氏、ターヘル・ナジーブ氏

テーマ研究

1

日本における中国古典演劇の受容と研究

研究代表者：岡崎由美（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：平林宣和（早稲田大学政治経済学学術院准教授）、岩田和子（早稲田大学文学学術院助手）、川浩二（早稲田大学文学学術院非常勤講師）、黄仕忠（中国中山大学中国古文献研究所所長）、傅謹（中国戯曲学院戯曲研究所所長）、王宣標（中山大学中国無形文化遺産研究センター助教）

日本における中国古典演劇受容の一形態を示す資料として、明代伝奇『水滸記』の日中対訳抄本を三種発見した。これらは早稲田大学演劇博物館所蔵本、山口大学図書館所蔵本、関西大学図書館所蔵本であり、その日本語訳は、他に類を見ないほぼ全訳であること、日中対訳形式であること、さらに三種がそれぞれ独立したものではなく、草稿から完成稿へのプロセスを示す同一テキストであることを明らかにした。これは、日本人による中国古典演劇のテキスト解釈の様相を示すのみならず、翻訳作業の具体的な工程を明らかに示す極めて稀な資料である。日本における中国古典小説の翻訳についてはすでにかなり研究が進んでいるが、中国戯曲についてはほとんど未開拓であり、さらにこのような翻訳のプロセスを示す複数の抄本は他に類がなく、また世に知られていない。江戸期の唐話学習や『水滸伝』研究の方面からも、貴重な資料といえる。また、山口大学図書館所蔵本は山口藩毛利家の旧蔵であり、本抄本が中国古典演劇に対する日本最古の全訳稿本である可能性も高く、その点でも貴重な資料であるといえる。三種のうち完成稿と目される早稲田大学所蔵本については、研究協力者伴俊典氏の設計によるデジタル・テキスト・データベースを作成し、演劇博物館のホームページに試験公開した。

また、日本に所蔵される説唱文芸版本の総合的把握をめざす中国説唱書誌調査法研究会を立ち上げ、説唱版本の書誌データをとりながら、その実践の中から説唱版本の資料の特性を活かすデジタル目録フォーマットの構築を模索した。

一方2010年度から、江戸から明治にかけての文字ベースの中国古典演劇受容に加えて、それに続く時期、すなわち明治末期から昭和初期の時代における実際の上演を基盤とした中国古典演劇の受容に関する研究活動を開始した。中国の清末に当たる明治末頃から、直接中国に渡って彼の地で上演される昆劇や京劇などの中国古典演劇に接する日本人が出現し始め、また京劇の梅蘭芳や昆劇の韓世昌といった一流どころの俳優による訪日公演も行われるなど、日本における中国古典演劇受容はより多面的な展開を見せるようになった。昭和三年に開館した演劇博物館には、この時代の資料が数多く残されており、2010年度においては中国戯曲学院（伝統演劇大学）戯曲研究所所長の傅謹教授、および梅蘭芳訪日公演研究に業績のある武漢大学の鄒元江教授とともに演劇博物館所蔵資料の検証を実施、また1923年に上海で日本人により組織された支那劇研究会とその会報『支那劇研究』についての調査を行い、それぞれの研究成果は下記の後期報告会および講演会において発表された。

テーマ研究

2

台本による歌舞伎作品復元の調査・研究

研究代表者：古井戸秀夫（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

研究分担者：鈴木英一（聖学院大学日本文化学科非常勤講師）、今岡謙太郎（武蔵野美術大学造形学部教授）、児玉竜一（早稲田大学文学部教授）、安富順（桐朋学園短期大学演劇専攻等非常勤講師）

研究目的①「演劇博物館所蔵歌舞伎台本のデータ化の研究」では、「A 虫食い破損部分の修復研究」では、修復の専門家と歌舞伎台本の研究家の共同研究が始まった。虫食いの台本が修復により、文化資源として新しい価値を獲得するかが、新たな研究課題となった。「B データ化の研究」では、昨年度データ化した、狂言作者の自筆の書き下ろし台本を多く含む「口16」の内容の分析に入った。

研究目的②の個別研究の研究成果は、以下の通りである。

個別研究①「鶴屋南北の台本研究」 国立劇場復活上演候補作品として、①『曾我祭侠競』、②『念力箭立相』の上演原案を作成した。

個別研究②「歌舞伎舞踊の台本研究」では、『命懸色の二番目』（雷のお鶴）ほか、三作品の上演原案を作成した。

個別研究③「黙阿弥の台本研究」では、『梅雨濡仲町』（国立劇場・正本写合巻集5）の編集・刊行を指導した。

個別研究④「義太夫狂言の台本研究」では、国立劇場文芸課と協力して、復活上演準備台本『大塔宮囃鑑』を刊行した。

個別研究⑤「大坂歌舞伎の台本研究」では、池田文庫所蔵の歌舞伎台本の調査を行った。

個別研究⑥「映像資料のデータ化の研究」では、①「舞踊学にとってアーカイブスとは何か」、②「山村流の舞踊」、二つのワークショップを映像データ化した。

テーマ研究 3

舞台芸術 創造とその環境 日本／世界

研究代表者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：上田洋子（早稲田大学演劇博物館助手）、曾田修司（跡見学園大学教授）、松井憲太郎（富士見市民文化会館キラリふじみ館長）、恵志美奈子（世田谷パブリックシアター学芸職員）

2010年度はまず4月に、モレキュラーシアターとの共催により『バレエ・ピオメハニカ』の試演、およびラウンドテーブルを開催し、独特の作品哲学と方法論を持つモレキュラーシアターの作品および創造過程に焦点を当て、演劇博物館で開催される企画展示およびラウンドテーブルを通じて、さらにその背景にあるロシア人演出家メイエルホリドの今日の日本における意義を検証した。

10月にはドラマトゥルクのヴァルダ・フィッシュ氏を招いて、イスラエル演劇の歴史とドラマトゥルクの役割について研究会を開催した。11月にはフェスティバル／トーキョーとの共催により、世界の第一線で活躍するアーティストを迎えてF/Tユニバーシティを開催し、今年度はジゼル・ヴィエンヌ（フランス）、ロジェ・ベルナット（スペイン）を講師として迎え、その独特の創造の美学と方法論を学んだ。同じ11月には、演劇におけるオーラル・ヒストリー研究の準備段階として、先行する美術史の領域から加治屋健司氏を招いて美術史におけるオーラル・ヒストリーの展開と課題について話を聞いた。

2011年1月にはオーストラリア、メルボルン大学准教授でドラマトゥルクでもあるピーター・エカソル氏を招き、現代演劇におけるドラマトゥルギー概念を再考する研究会を開催した。2月には前年度に実施したベン・サントス・カバンゴン氏招聘事業を受け継ぐかたちで、世田谷パブリックシアターとの共催によりPETA（フィリピン教育演劇協会）のアーニー・クロマ、クリス・ゴンザレス両氏による研究会を開催し、ワークショップ・ファシリテーターの養成の手法、社会認識・自己認識の変化を促すワークショップの方法論を学んだ。

さらに同月には「TPAM in Yokohama」と連携してベルギーよりユーゴ・ドゥ・グレーフ氏を招聘し、フェスティバルの今日的意義を問うラウンドテーブルを開催したほか、ベルギー・フランダース地域の文化政策に関して聞き取り調査をおこなった。外部機関と連携することによって単独ではなしえないような研究と実践が融合したプロジェクトを実現することが可能になり、その成果もまた広く演劇界に還元できたと自負している。

テーマ研究 4

現代日本演劇の海外への紹介・翻訳プロジェクト

研究代表者：竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、秋葉裕一（早稲田大学理工学術院教授）、高橋敏夫（早稲田大学文学学術院教授）、土居伸彰（早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点研究助手）、堀切克洋（早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点研究助手）

昨年度に発足したテーマ研究「現代日本演劇作品の翻訳研究」は基礎研究を終えた段階で、高橋代表が提携を想定していた井上ひさし氏の死去や、アメリカ側の翻訳担当者の不在などでプロジェクトの継続が難しい状況となったため、急遽研究チームを再編し、藤井慎太郎本学教授を中心に、鴻英良・谷川道子・内野儀の各氏に参集を呼びかけ、未翻訳のヨーロッパ演劇理論の紹介を活動の主要内容とすることが話し合わせ、運営委員会の議を経てテーマの変更、チームの再編が認められた。そこで英米演劇（内野）・フランス演劇（藤井）・ドイツ演劇（谷川）・ロシア演劇（鴻）・東南アジア演劇（松井）の各分野で翻訳対象文献を博搜し、それぞれ傘下の若手研究者を中心とする翻訳作業チームを構成することになった。アジア系演劇については、日本及び中国の演劇理論研究者の参加を待って開始することとし、本年度は「世紀末転換期演劇論」として、20世紀初頭前後のヨーロッパ演劇理論を中心に作業を進めることとした。

6月中に人選を行って複数の若手研究者に原稿を依頼し、12月末を締め切りとして総計でA5換算にして600頁分ほど

の翻訳を行うこととし、それを原則として冊子ではなく、拠点ホームページにアップロードし、Web上の書籍の形でPDFファイルを無償公開することとし、また閲覧各位の意見を参照して翻訳原稿を改訂する余地を残すこととした。翻訳原稿については年内にすべて集まり、各分野の責任者による概論執筆も行った。3月末には、編集作業が進行中のフランス演劇を除くほぼすべての予定原稿をアップロードすることができた。サーバは拠点独自のものをを用いて物理的には演劇博物館サーバからは独立させ、見かけ上は演博ホームページから拠点ホームページに遷移出来ることとした。その全内容については、連携拠点ホームページを参照されたい。

なお著作権処理に関しては専門業者に委託したが、すでに著作権が消滅したものもあり、また著作権者不明の例がきわめて多かった。これについてはなお博搜中であるが、そうしたものを断りを入れてアップロードした。1件は紙媒体での公開以外は認められないとの立場であったので、2011年度演劇博物館紀要『演劇研究』に掲載の予定である。

テーマ研究 5

演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用

研究代表者：入江良郎（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）

研究分担者：児玉竜一（早稲田大学文学部教授）、上田学（早稲田大学演劇博物館助手）、棚木章（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、岡田秀則（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、板倉史明（東京国立近代美術館フィルムセンター研究員）、碓井みちこ（関東学院大学文学部専任講師）、金子健（東京文化財研究所無形文化遺産部研究補佐員）

演劇博物館が所蔵する全映画フィルム・コレクションの目録化と活用の推進を目標とする本研究では、昨年度に引き続き①個々のフィルムの作品情報（フィルムの内容や文字情報など）ならびに②所蔵情報（フィルムの規格や尺長、素材のコンディションなど）の採集を行った。また、そのままでは映写・再生が困難な8mmフィルムと35mm可燃性フィルムについては、①の調査に必要なメディアの作成を先行して行った。

- ・8mmフィルム 今年度は80本を対象にDVCAM及びDVDへのメディア変換を行った。昨年度の171本とあわせて2年間で、メディア変換が可能なコレクション全て（全271本のうち249本）の作業を終えることができた。また、前年度にメディア変換が終了している作品については、内容の調査にも着手した。
- ・35mm可燃性フィルム 所蔵の可燃性フィルム（玩具映画）全21本を対象に、DVCAM及びDVDへのメディア変換を行った。
- ・16mmフィルム 編集台を用いたフィルムの検査と文字情

報の採集を行い、所蔵本数572本のうち459本の作業を終えた。また、これらのうち特に重要と思われる作品については、49本を選びDVCAMならびにDVDへのメディア変換を行うとともに、35mmプリントの作成についても今後の可能性を検討した。

次年度以降は、採集した情報をもとにデータベース構築の本格的な作業に着手するとともに、とくに重要と思われる作品について、それぞれの歴史的文脈にも踏み込んだ専門研究と、公開用メディア作成を行う予定である。

なお、今回の作業で作成されたメディアは、本研究の終了後も内外研究者のための利用媒体として使用することが可能であり、既に一部は演劇博物館の展覧会「六世 中村歌右衛門展―歌舞伎座とのあゆみ」（2010年3月～4月）、「森繁久彌展―人生はピンとキリだけ知ればいいー」（2010年9月～11月）、「時代劇映画史展 演博コレクションから」（2010年11月～2011年2月）でも公開されている。

テーマ研究 6

日本映画、その史的社会的諸相の研究

研究代表者：岩本憲児（日本大学芸術学部大学院映像芸術専攻教授）

研究分担者：碓井みちこ（関東学院大学文学部専任講師）、大久保遼（東京大学大学院学際情報学府博士後期課程）、古賀太（日本大学芸術学部教授）、小林貞弘（椋山女学園大学他非常勤講師）、田島良一（日本大学芸術学部教授）、本地陽彦（フリー）、松本夏樹（大阪芸術大学非常勤講師）、渡邊大輔（日本大学芸術学部大学院映像芸術専攻博士後期課程）

全体を二つのテーマ、テーマA「日本映画草創期の研究」とテーマB「日本映画と社会：国内外における受容と評価の比較研究」に分けて研究を行う。いずれにも内包される個別的課題は多岐にわたるので、大きな成果を上げるには共同研究が求められる。これまで演劇博物館に蓄積された資料を利用するのは当然であるが、新たな資料発掘と収集も必要となるだろう。ただし、2010年度はテーマAを「日本映画の誕生」に絞って研究を一段落させた。2011年度から研究分担者若干の入れ替えを行い、テーマBへと移行する。

【研究内容】

本研究（テーマA「日本映画草創期の研究」）では、通説として流布されてきた日本映画誕生期の多様な問題を再検討してきた。また、これまでに見逃されたり、軽視されてきた諸相を発掘し再検討した。そこから、日本映画草創期にあったと思われる、先行芸能や先行技術との関連、幻燈や映画の渡来

後の日本化の特徴、萌芽期にあった可能性とその後の展開、興行用に製作されたものだけではない映像メディアの多様性、たとえば家庭用映像機器の調査などを行った。文献資料はもちろんのことであるが、若干の映像資料の収集や再検討も行ってきた。

分担研究の個別テーマは「エジソン映画と日本」、「駒田好洋とその資料」、「写し絵から映画へ」、「日本におけるメリエス映画」、「地方映画の草創期」、「無声映画の音」、「小林喜三郎再評価」、「映画『紅葉狩』の撮影日」「孫文と梅屋庄吉、その背景」、「明治期の家庭用映像機器」、「初期映画と観客の身体」。

このように、日本映画初期の諸相が多様な視点から明らかにされたのは、本研究の成果であるが、研究が進むにつれて、さらに調査が必要と思われる課題も次々に現れた。今後の課題である。

○公募研究

本拠点の研究資源の有効利用を前提とする研究テーマを一般に公募して、審査・採択された研究テーマに共同研究の場と研究資料とを提供するものです。(研究期間：一年間)

公募研究

1

日本における記録映画の受容についての史的考察

研究代表者：奥村賢（いわき明星大学人文学部表現文化学科教授）

研究分担者：川村健一郎（立命館大学映像学部准教授）、佐崎順昭（東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員）

(1) 日本の記録映画とドイツの Kulturfilm との影響関係の解明について

現地調査でオリジナル版と日本公開版が比較可能になり、字幕をのぞき、公開段階での編集はほとんどなされていないことが確認された。これによってドイツの Kulturfilm の影響が映像表現に関するかぎり、ほぼ直接的なものであることが判明した。Kulturfilm の輸入、配給の経過に関しても、東宝東和社長・川喜多長政氏関連の資料をドイツで発見したことで、より詳しい内容を知る手掛かりを得た。

(2) 15 年戦争期における文化映画、ニュース映画の受容について

当初、巡回上映に焦点を絞り、当時の文化映画、ニュース映画がどのように観られていたかを考察することを考えていたものの、その前提として、太平洋戦争期に製作が奨励された「戦記映画」のジャンルとしての機能を明らかにすることが不可欠とわかり、その作業に力点を置くことになった。これまで、『マ

レー戦記』など個別の作品に触れる研究はあったが、一連の「戦争記録もの」を取り上げ、そのジャンルの特質に触れる考察は初めてのものである。「戦記映画」の中には興行的に成功した作品もあったが、その背景に強制的な鑑賞があったことも知られている。今回の調査でクロス・アップの位置づけなど、戦記映画における映像表現の特徴があきらかになったことで、誰が、どのようにこうした映画を観たのかという受容全体の問題についてより深く研究を発展させていくことが可能になった。

(3) 「文化映画研究」（1938-1940）、「文化映画」（キネマ週報社、1938-1940）、「文化映画」（映画日本社、1941-1943）の目録化について

「小畑文庫」で3雑誌を複写し、データベース化に着手。その際、目次からだけでなく、記事内容を読み込んだ上で、人名や作品インデックスを附することを考慮した。1938 年から1943 年という映画法施行前後における「文化映画」の主要な言論動向をより具体的に把握することができるようになった。

公募研究

2

仮面舞チャムの儀礼世界の研究—チベット文化圏と日本における仏教儀礼／芸能の比較から—

研究代表者：木村理子（東京大学教養学部非常勤講師）

研究分担者：高橋悠介（神奈川県立金沢文庫学芸員）、額爾敦白音（エルデネバヤル）（中国内蒙古大学蒙古学学院教授）

本研究では、チベット仏教仮面舞チャムの調査と記録を行い、仮面舞踏としてのみ見られがちなチャムを、密教儀礼として分析し、チャムの儀礼世界をチベット密教の中に位置づけた上で、日本中世の密教における忿怒相の明王の修法や魔を払う儀礼との比較考察を試みた次第である。チベット密教の忿怒尊の修法を日本中世の密教修法と比較研究することによって、両者の類似性と差異を明確に把握し、アジア仏教圏に展開した宗教芸能の儀礼世界とその背景を考えることが本研究の目的である。そのため、密教儀礼という観点からのチャム研究においては、木村と高橋が、インド北部・ラダックのニンマ派寺院タクトク寺のチャムを調査し、木村がその調査結果をとりまとめた。その他、木村はモンゴルにて忿怒尊修法の調査を行った。額爾敦白音は蒙藏文献中の忿怒尊修法に関する調査を担当、高橋は日本の鎌倉時代の調伏法や忿怒相の明王に関する文献の調査・分析を担当し、三者によって比較研究を行うことで、アジア仏教圏に展開した宗教芸能の儀礼世界の探求を試みた。

一、チャムの調査

(1) インド・ラダック調査

2010 年7月、インド北部ラダック・タクトク寺においてチャムの調査を行い、フィールドノートに基づき、詳細な式次第を

作成した他、チャムの準備段階から終了後の法会までの全行程の撮影を行った。これにより、中国領チベットから伝授されたラダック唯一のニンマ派のチャムに関する研究・分析のための一次資料を作成することができた。なお、撮影映像資料（複写）を拠点事務局に寄贈した。

(2) モンゴル調査

2010 年9月、モンゴル国ダシチョイリン寺並びにガンダン寺忿怒尊祀堂において、チャムの忿怒尊修法で用いるリャンガ（人形）の調査を実施し、これまで明らかにできなかったリャンガの製法とその特徴を明確化することができ、日本の密教儀礼における人形との比較が可能となった。

二、日本の密教儀礼の調査

2010 年11月、奈良秋篠寺並びに金峯山寺において、チベット仏教圏の忿怒尊と類似性を有する忿怒形の本尊の実見調査を行った。

三、研究会

2011 年1月、公開研究会において、ラダック・タクトク寺の調査やモンゴルでの調査に基づきチャムの分析を行った上で、チャムで執り行われる密教修法と日本中世の密教修法について人形に焦点を当てた比較考察を行い、チャム研究者と日本芸能研究者で意見交換を行った。

公募研究

3

明治・大正期の歌舞伎狂言作者および興行関係資料の研究

研究代表者：佐藤かつら（鶴見大学文学部准教授）

研究分担者：神田由築（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授）、中村緑（東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究博士課程）、磯部孝明（総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻博士後期課程）

本研究は、2009年度に共同研究「狂言作者竹柴其水興行関係資料の基礎的研究と翻刻作業」により行われた、狂言作者竹柴其水（1847-1923）の関係資料（ロ30-1473-1-109）についての調査をふまえ、新たに確認された其水関連資料（ロ30-1188-1-219）をも用いて、いまだ詳細が明らかではない河竹黙阿弥以後の狂言作者の実態や、役者と狂言とのかかわり、同時期の興行の様相などを幅広く追究することを目的としたものである。

本年度においては、四回の研究会を開き、資料の内容を検討し、分析を進めた。これにより得られた主な成果は、以下の二点である。

- (1) ロ30-1188-1-219の資料群の検討により、同資料群には番付下絵・舞台図や、引札、書簡、摺物、看病日記など、種々の資料が混在していることがわかった。なかでも「時代物登場人物二付考証一括」（006）や「〔山田長政関係書類〕」（026）、「〔近藤重蔵関係資料〕」（029）は、其水が作劇にあたり参照したものと思われる（明治32年1月明治座上演「山田長政誉軍扇」、26年3月市村座上演「山開

目黒新富士」、35年6月明治座上演「日本晴露領雪解」）。本年度の調査により、狂言作者の用いる情報や、その情報の使い方といった、本資料による分析・研究への端緒が開かれたと考える。

- (2) ロ30-1473-1-109の資料群から、木村涼氏（研究協力者）により『芝居書付』（ロ30-1473-59）の分析・検討がなされた。同資料は江戸三芝居の猿若町移転前後のもので、今村益之丞という武士が芝居茶屋に支払った代金の領収書の綴りである可能性が高いこと、棧敷代・土間代・飲食費の詳細、芝居茶屋利用には棧敷・土間・敷物代のほか弁当・すしなど定番のコースがあること、その料金は一回一両前後であることなど、芝居茶屋を利用した観劇の具体相が判明し、観客研究に資する重要な資料であることが明らかになった。

以上、本年度においては、資料の内容の調査と分析から、主に狂言作者の研究に関する今後への展望を開くとともに、幕末明治期の興行の様相にかかわる具体的な観客の姿の解明を行った。

公募研究

4

河竹黙阿弥の台本・正本写研究

研究代表者：今岡謙太郎（武蔵野美術大学教授）

研究分担者：岩井眞實（福岡福岡女学院大学表現学科教授）、埋忠美沙（早稲田大学演劇博物館客員研究員）、倉橋正恵（同志社女子大学文学部非常勤講師）、寺田志麻（早稲田大学オープン教育センター非常勤講師）

本研究の目的は、河竹黙阿弥の台本（写本・『黙阿弥全集』）と正本写の特徴の再検討と、両資料の比較による作品研究である。従来の黙阿弥研究では、『黙阿弥全集』が基本資料として用いられてきたが、その内容に不明な点が多い。黙阿弥の生誕200年を五年後に控えた今、黙阿弥研究のさらなる発展を促すために、資料の再検討を開始した。そのうえで、正本写を活用した作品分析をおこない、作品研究の新たな手法の確立を目指すものである。具体的な研究手法は以下の通り。

- 1、台本（写本・『黙阿弥全集』）と正本写の網羅的な調査・分析をおこなう。
- 2、1の結果を踏まえ、二つの手法で作品研究をおこなう。
第一に典拠を調査し、黙阿弥の作劇法を詳らかにする。
第二に正本写（歌舞伎を題材にした合巻）を活用し、写本・役者絵・番付等と照合し、物語と演出が変化する具体例を検証する。
- 3、主要な作品（台本・正本写）の翻刻をおこない、広く公開する。

具体的には、以下7作について、資料の調査・分析と作品研究をおこなった。

河竹黙阿弥作：「青砥稿花紅彩画」（文久2年）、「契情曾我廓亀鑑」（慶応3年）、「隅田川鶯音曾我」（慶応4年）、「明治年間東日記」（明治8年）、「英国孝子伝」（明治20年）

瀬川如皐作：「蟒於由曙評仇討」（慶応2年）、「近世開港魁」（明治7年）

このうち、「蟒於由曙評仇討」の台本と、「青砥稿花紅彩画」および「契情曾我廓亀鑑」の正本写の翻刻を行った。成果は、国立劇場調査養成部刊『未翻刻戯曲集』と『正本写合巻集』に反映させた。

各作品について詳細が明らかになったが、具体例として「青砥稿花紅彩画」（白浪五人男）の調査結果を述べる。従来、本作の初演台本は現存せず、『黙阿弥全集』が現行の上演台本に近い内容といわれていたが、演劇博物館所蔵の写本が初演系台本であることと、現行上演では『黙阿弥全集』よりも初演系写本に近い台本が利用されていることを明らかにした。さらに作品研究の結果、黙阿弥が歌舞伎・浄瑠璃の先行作よりも、実録に基づいて物語を作っていることを詳らかにした。また正本写が初演に忠実な資料で、役者絵との比較により、演出の変化を読み解けることを明らかにした。

公募研究 5

近代日本演劇における〈西洋〉の受容と〈国民文化〉構築に関する発信型研究

研究代表者：松田幸子（筑波大学外国語センター準研究員）

研究分担者：杉本裕代（東京都市大学知識工学部助教）、山本佐恵（日本大学非常勤講師）、吉田季実子（東京大学大学院博士課程）、溝渕久美子（名古屋大学大学院博士課程）、志賀亮史（劇団百景社主宰）

①「高麗筑波研究集会」（松田幸子、山本佐恵）：戦前・戦時期の日本と朝鮮の演劇・映画を通しての交渉の歴史を議論した。とりわけ、植民地政策として、いかに、演劇・映像メディアの可能性が模索されたのかを確認した。

②「NTU Shakespeare Forum」（松田幸子、吉田季実子）：シェイクスピア演劇が、宝塚などの現代の大衆文化のなかで、いかに改作・咀嚼されていくのかを議論した。

③「台湾政治大学国際シンポジウム：Text, Image, Desire: Representations of Trans-national Popular Culture」（松田幸子、吉田季実子、杉本裕代）：シェイクスピア演劇などの西洋文化が、現代の大衆文化のなかで、いかに表象されるのか

について、議論した。

④自主講座「日本大衆文化と「人形の家」—明治期から現代まで」（松田幸子、吉田季実子、杉本裕代）：劇団百景社の公演と連動して、イプセンの『人形の家』が、明治期から現代まで、いかに受容されてきたのかについて、とりわけジェンダーの点から考察した。

⑤シンポジウム「近代日本演劇における〈西洋〉の受容と〈国民文化〉構築」（全研究分担者）：「明治・大正期の演劇・映像メディアと近代的〈知〉の生成」をテーマにシンポジウムを開催し、今年度の統合をはかった。

公募研究 6

全体主義下における演劇・映像を中心としたマスカルチャーとメディアの総合的研究

研究代表者：貝澤哉（早稲田大学文学学術院教授）

研究分担者：石田美紀（新潟大学人文学部准教授）、志村三代子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、竹峰義和（日本大学法学部助教）、西岡あかね（東京外国語大学外国語学部専任講師）、森平崇文（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）

本研究の目的は、全体主義文化において国民を総動員し組織化するマスカルチャー・メディアを横断的に検討することであった。この目的達成のため、二回の研究会と表象文化論学会でのパネルによる研究成果発表をおこなった。研究会は他の学会との共同開催とし、多様な研究者間の相互交流や積極的な意見交換も目標とした。

第一回研究会（日本映像学会テキスト研究会と共催）では、竹峰義和が「西部からの呼び声：ナチス政権下のルイス・トレンカー監督作におけるアメリカ表象」を発表し、ナチズム期のドイツ娯楽映画における西部劇のイミテーションの問題をとおり、全体主義文化とアメリカ大衆文化との関係を明らかにした。発表は日本映像学会員からも高く評価され、発表後活発な意見交換もなされ、高い成果をあげた。

第二回研究会（新潟大学人文学部研究プロジェクト「文化史・文化理論の再構築」と共催）では、イタリア映画専門家石田美紀によるファシズム期イタリア映画、比較文学者猪俣賢司氏による、戦後日本映画における戦時中の表象の継続に関するレクチャーのほか、森平崇文が毛沢東時代の中国における「雑技」の国家管理化について、志村三代子が勤労働員映画、

黒澤明の『一番美しく』における身体表象の問題について発表した。石田氏の発表は、専門家の少ないイタリア・ファシズム期映画とハリウッド大衆映画技法との関連を示唆し、また猪俣氏の発表は、テキストの精緻な読解にもとづき、戦前と戦後の映画表象の連続性を浮き彫りにする高度なもので、研究上の通説を更新する大きな成果となった。

表象文化論学会第五回研究発表集会（2010年11月13日）では、森平、志村に、日本映画研究者劉文兵氏を加えたパネル「動員される身体：日本と中国」をたて、毛沢東期中国と戦前・戦後日本の映画における、動員される者たちの身体表象について多角的に検討した。森平による新資料を使った大衆芸能の組織化の研究や、志村による戦時期日本映画の女性表象の特性の指摘は、先行研究が不十分だった面を明らかにするもので、聴衆から高く評価された。また貝澤哉は、2011年1月22日東京外語大主催の国際シンポジウム「自由への試練：ポスト・スターリン時代の《抵抗》と《想像力》」にパネリストとして招聘され、発表「液化化するスクリーン：雪解け期のソ連《ヌーヴェルヴァーグ》映画」をおこなって本研究の成果を広く一般聴衆に発表した。

公募研究

7

人形浄瑠璃の復元上演に関する資料学的研究—淡路人形座を実践例として—

研究代表者：神津武男（早稲田大学高等研究所研究員）

研究分担者：久堀裕朗（大阪市立大学文学研究科教授）、正井良徳（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館館長）、松下師一（松茂町歴史民俗資料館人形浄瑠璃芝居資料館主任学芸員）

【研究目的】

人形浄瑠璃の伝承団体は日本各地に散在する。江戸時代最大の流派は、浄瑠璃は義太夫節で、人形操りは三人遣いによるもので、その専業者（いわゆるプロ）の後継団体は現在ふたつ。ひとつは「人形浄瑠璃文楽」で、中央／大都市を活動の拠点とした系統、もうひとつは「淡路人形座」で、中央以外の日本全国を巡業した系統、の後継である。本研究課題では、淡路人形座との提携によって、演技伝承を失った作品について、現存諸資料を学術的に活用して、演技伝承の復元・復活を試みようとするものである。

【研究方法】

近年文楽とその周辺での復元・復活は、内実は「何十年ぶりの久しぶりの再演」や、復元・復活の具体的な作業を演技者に一任する例が多い。国立劇場でも、能楽や歌舞伎での研究者との連携は珍しくないが、人形浄瑠璃では研究と上演の現場が正面から協力し合った復元上演は無い。本研究課題では、復元上演に際して「上演前の現存諸資料の踏査」「諸資料の検証研究に基づく台本作成」「演技者との連携による舞台の創造」といった当たり前の作業を行い、人形浄瑠璃にお

ける復元上演の「手本」典型を示すことを試みる。

【研究成果】

「淡路座独自の演目」の最大の資料は、早稲田大学演劇博物館が1970年に豊澤町太郎師に委嘱して作成した録音である。今年度の事業では、2011年2月20日上演『奥州秀衡有髻壱』二段目ノ口「鞍馬山」がこれに該当する。演劇博物館の保存・記録の活動が、40年の時を経て、後進の淡路人形座へと再び還されることは、何より望ましい姿だと考える。

研究分担者各自の成果としては、久堀裕朗氏による淡路座旧蔵台本の調査研究によって、淡路座の独自本文を見出し得たこと（『仮名手本忠臣蔵』五段目）。正井良徳氏の聞き取りによって、昭和前半期の市村六之丞劇場の興行のあり方が判明したこと。松下師一氏の協力により徳島県に所在する、淡路系のタンゼン（文楽でいうツメ）の良品を見出し、これを模刻、「鞍馬山」復活上演に使用し得たこと、を挙げたい。

竹本駒之助師の60年ぶりという里帰りを実現したこと、また駒之助師より淡路人形座の活動に関する今後も協力くださることをお申し出いただいた。関係者各位の連携を取り結び得たことが、研究代表者としての最大の成果かと考える。

公募研究

8

説明台本を基礎とした弁士の機能に関する総合的研究

研究代表者：上田学（早稲田大学演劇博物館助手）

研究分担者：板倉史明（東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、今田健太郎（大手前大学メディア芸術学部非常勤講師）、碓井みちこ（関東学院大学文学部専任講師）、大久保遼（東京大学大学院学際情報学府博士課程）、大傍正規（早稲田大学演劇博物館グローバルCOE研究助手）、松谷容作（神戸大学人文学研究科学術推進研究員）、横田洋（大阪大学総合学術博物館研究支援推進員）

演劇博物館が所蔵する説明台本をはじめとした、弁士関連資料にもとづく共同研究として、今年度に開催した計四回の研究会を中心に、具体的に以下の研究成果を挙げた。

(A) 第1回研究会において、著名な弁士の一人であった駒田好洋の孫、駒田好二氏と鈴木雄三氏を招へいし、共同研究者による聞き取り調査を実施した。また関連して前川公美夫が、好洋の北海道巡業に関する研究発表をおこなった。なお、聞き取り調査の成果をもとに、上田学が演劇博物館所蔵の好洋旧蔵スクラップブックを再検討し、『演劇研究』34号（演劇博物館）で報告としてまとめた。

(B) 第2回研究会において、演劇博物館が所蔵する、弁士の梅村紫声旧蔵資料の説明台本、および連鎖劇台本の調査を共同で実施した。これにより、書き込みのある説明台本の抽出、および連鎖劇台本の演目ごとによる組み合わせの判別をおこなった。この調査成果を踏まえて、選定した台本（説明台本25点、連鎖劇台本63点）をデジタル化した。

(C) 第3回研究会において、シカゴ大学のマイケル・レイノ助教を招へいし、小津のサウンド版における「サイレント」としての特性に関する研究発表がおこなわれた。また関連して上田学と大久保遼が、共同研究の成果を踏まえつつ、それぞれの研究分野から弁士について研究発表し、他の共同研究者も交えて、弁士を対象とした日米の研究に関する意見交換をおこなった。

(D) 第4回研究会において、大傍正規と今田健太郎が、太田市立新田図書館の田中純一郎旧蔵資料の調査成果（2009年度）に関連して研究発表をおこなった。この研究会は、視聴覚文化研究会との共催によって公開とし、研究成果を共同研究外部へ発信するとともに、参加者との活発な意見交換がおこなわれた。

(E) 駒田好洋旧蔵資料の「全国活動写真説明者番付」（1925年）について、計1226レコードを採録するとともに、弁士に係わるカラム（氏名、都市、映画館等）を設定してデータベース化した。

点在する演劇—映像関連資料の体系的把握を通じたトータルな資料体の構築及びそれに基づく演劇史—映像史の交錯に関する研究

研究代表者：吉原ゆかり（筑波大学人文社会科学部研究科准教授）

研究分担者：岡田秀則（独立行政法人東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員）、坂尻昌平（日本大学芸術学部非常勤講師）、洪善英（翰林大学日本学研究所専任研究員）、土居安子（財団法人大阪国際児童文学館主任専門員）

大阪国際児童文学館（府立中央図書館内）、神戸映画資料館、エル・ライブラリー（旧大阪産業労働資料館）、京都府京都文化博物館、東映資料室、三重県立図書館等、主に関西の演劇・映像関連資料を所蔵しているアーカイヴスにおける調査を複数回実施した。その結果として、占領期から1970年代頃にかけて製作され、学校および社会における視聴覚教育や、児童運動・労働運動等の場で使用された幻灯／スライドのフィルム及び台本多数をはじめとする未整理・未公開資料の所蔵を確認した。これらの幻灯／スライド資料は、占領期以降の映像を用いた社会教育運動の資料として貴重であるのみならず、たとえば『レ・ミゼラブル』（前後篇、伊藤大輔／マキノ正博監督、東横映画、1950）ほか、現在完全なフィルムの所在が確認されていない映画作品の幻灯版、前進座、人形劇団ブーク等の舞台公演の幻灯版などが含まれており、演劇・映画資料としても貴重な価値をもつものと考えられる。発見した幻灯／スライド資料に関しては、内容の調査を行い、一部を目録化した。

存命の映画・演劇関係者の協力によるオーラル・ヒストリーの収集という目的に関しては、旧松竹撮影所にて、主に助監督・シナリオライターとして活躍した熊谷勲氏に二回の聞き取り調査を実施した。インタビューは渋谷実監督、森崎東監督をはじめ、氏の参加された映画作品をビデオモニターで視聴しつつ進行し、現場での具体的な演出やスタッフワークの実態を克明に思い起こしていただくことを試みた。その結果、昭和30年代から40年代にかけての撮影所内の映画作りの実情や労働運動に関する貴重な証言の数々を得ることができた。

2010年6月14日及び12月27日に早稲田大学内にて研究成果報告会を開催した。さらに、2011年2月12日にソウル・漢陽女子大学にて開催された第82回韓国日本学会学術大会に、李正旭、紙屋牧子、鷺谷花の研究協力者3名が参加し、関西での資料調査の成果の一部を発表した。また、これに関連して、ソウル市内および東京都内のアーカイヴスにおける、主に植民地時代を中心とする演劇・映像資料の所蔵状況に関する調査をおこなった。

メイエルホリドと越境の20世紀

研究代表者：上田洋子（早稲田大学演劇博物館助手）

研究分担者：マリヤ・マリコワ（ロシア科学アカデミーロシア文学研究所ロシア・外国文学相互関係部門上級研究員）、マリナ・コレネワ（ロシア科学アカデミーロシア文学研究所ロシア・外国文学相互関係部門上級研究員）、藤井慎太郎（早稲田大学文学学術院教授）、楯岡求美（神戸大学大学院国際文化学研究所准教授）、伊藤倫（一橋大学大学院言語社会研究科博士課程）、内田健介（千葉大学大学院人文社会学研究科博士課程）

本研究は演劇人フセヴォロド・メイエルホリド（1874-1940）の創作を、20世紀初頭の芸術における世界文化の交差と結合の観点から考察するものである。研究分担者にロシア科学アカデミー文学研究所比較文学部門からマリヤ・マリコワ、マリナ・コレネワの二人の研究者を迎え、メイエルホリドにおける越境の問題を多方向の視点から考察することを目指した。演博資料の調査、およびロシアにおけるアーカイヴ調査・ヒアリング調査を行い、また合計5回の研究会と、2日間の国際シンポジウムを開催して意見交換と成果発表の場を持った。

2010年6月に研究代表者の上田がモスクワとサンクトペテルブルグに出張し、分担者のマリコワ、コレネワ両氏と研究打ち合わせを行い、その協力を得つつ、サンクトペテルブルグ演劇博物館、公立図書館などで資料調査を行った。さらに、ビオメハニカを実践する演出家たちにインタビュー形式の聞き取り調査を実施した。調査結果は研究会で報告した。演博の資料調査としては、野崎韶夫旧蔵未整理資料6箱を調査、その

うちのパンフレット類は演博データベースの海外演劇情報上演資料データベースの構築と連動して整理を行った。そのなかでメイエルホリド劇場の新たなパンフレットなども発見された。また、二世市川左團次のソヴィエト公演貼り込み帳の調査を進め、研究分担者マリコワをはじめとする海外の研究者に紹介し、資料の価値を確認するとともに、この資料を今後いかに研究していくべきか議論を持った。

今年度最大の成果は2010年12月17・18日に開催した国際シンポジウムで、本研究会のメンバーのほか、大阪大学の永田靖氏ら計6人の研究者が講演・発表を行い、司会の谷川道子氏、コメンテーターの鴻英良氏らを交えて活発な議論と意見交換がなされた。このシンポジウムでプレヒトや日本演劇との関係、および音楽や美術とのジャンル交流に関しても「越境」がメイエルホリド研究の一つの重要なキーワードであることが再確認された。その後、記録音源を文字に起しており、現在体裁を整えて拠点ホームページにアップロードする準備を進めている。

公募研究

11

伎楽面の総合的研究及び復元模刻制作

研究代表者：簀内佐斗司（東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復彫刻研究室教授）
研究分担者：仲裕次郎（同大学大学院同研究室非常勤講師）、益田芳樹（同大学大学院同研究室非常勤講師）、小沼祥子（同大学大学院同研究室教育研究助手）、藤曲隆哉（同大学大学院同研究室博士課程）

今回の研究においては、東大寺蔵・伎楽面「酔胡王」の総合的調査を行っただけでなく、当時と同じ材料、技法にて実際に当初の姿を再現したことに大きな意味を持つ。調査で導き出した推論が、制作という実技を通じて確信へと変わることこそが、本研究のテーマである総合的研究の本質であると我々は考えている。

今回調査においては、通常の熟覧調査だけでなく、形状をデジタル化して記録する3Dレーザー計測、顔料を推定する蛍光X線分析、矧ぎ目等構造を映し出すX線撮影等の光学的調査を行った。その結果、既往研究では知り得ない貴重な情報を収集することが可能になり、本研究の基礎資料として大いに役立つ結果となった。

良質の桐の丸太をX線撮影によってわかった木目等の情報に照らし合わせ、また3Dレーザー計測によって得られた図面を用いて、実際に彫り進めた。デジタルデータから法量算出や断面図など必要に応じた寸法や図を用いることで効率良く

彫刻作業を進めることが可能になった。また実物では欠損している部分については、今回当初復元を目指すこともあって、形状を復元した状態で彫った。

彫刻作業の後、全体に錆漆を施し、白土を塗り、その上に顔料を塗っていくわけだが、今回行った蛍光X線分析で、ある程度使用された顔料が推定できたが、模様などの形については赤外線写真からもはっきりした形を見出すことができず、目視できる部分を基本とし、天平時代の他作例模様を参考に想定復元を行った。

今までにも復元した伎楽面の事例は多く見られるものの、本研究のようにレーザー計測、X線撮影、蛍光X線分析、赤外線写真といった多岐にわたる総合調査を行って当初復元を目指した伎楽面は稀有といっても過言ではなく、今後の伎楽面調査・模刻におけるひとつのケーススタディとしてもたいへん貴重である。また今後他伎楽面を同様手法で調査・模刻を行うことで、研究手法を一段と確立していくことも必要である。

公募研究

12

坪内逍遙遺文の収集調査に基づく「坪内逍遙新集」（仮称）の刊行

研究代表者：松山薫（早稲田大学図書館専任職員、早稲田大学教育学部・非常勤講師、（財）逍遙協会理事）
研究分担者：濱口久仁子（（財）逍遙協会事務局長）、林京平（（財）逍遙協会理事）、菊池明（（財）逍遙協会理事）、梅澤宣夫（早稲田中学高等学校教諭、（財）逍遙協会評議員）

（財）逍遙協会における長年の坪内逍遙関係資料の調査研究に基づき、本研究チームにより2011年度から「坪内逍遙新集」（仮称）を刊行することとなった。その内容構成は、第一集「坪内逍遙書簡集」（5巻）、第二集「坪内逍遙日記」（3巻）、第三集「坪内逍遙書誌」（2巻）で、2010年度はこの内の「逍遙書簡集」「坪内逍遙日記」の作業を中心に進めた。

1. 「坪内逍遙書簡集」刊行のための研究・調査・翻刻・執筆・編集

逍遙協会が既に調査・複写した坪内逍遙の諸家宛書簡2254通の内、早稲田大学（図書館・演劇博物館・大学史資料センター等）所蔵1040通、逍遙協会所蔵1002通を再調査して収録することとし、担当を決めて書簡原本再確認の上、本文の翻刻・宛先人物の経歴と逍遙との関係調査・書簡それぞれに解説を付し、3月末までに1500通の原稿が完成し入稿した。あわせて校正・図版選定・索引等の準備にも着手することが出来た。

今回翻刻中の逍遙書簡には一通ごとに詳細な解説を付した。書簡の中で逍遙は様々な活動の苦心や真意を自身のこと

ばで綴っており、今回収録予定の多くが初公開で、日本演劇史、文学史研究の上で貴重な資料である。2010年度は収録予定のうち四分の三の入稿を終了し、次年度の出版に向けてほぼ予定通り実施できたといえる。

2. 「坪内逍遙日記」刊行のための準備作業—基礎調査と撮影

「書簡集」の次に刊行予定である「坪内逍遙日記」（明治20年～昭和10年）の準備作業として撮影のための再調査と、デジタル撮影を行った。全巻の翻刻作業は一応完了しているが長期間に渉り複数の校訂者によって行われたため、翻刻基準が不統一で未収録箇所もあるため、今回の出版では凡例を統一して、すべて原本照合する予定である。しかしながら原本の保存状態を考慮し、デジタル撮影の上、原本照合は画像による照合作業とし難読箇所のみ原資料照合することとした。今年度実施した撮影は6300カットに及んだ。

「坪内逍遙書簡集」「坪内逍遙日記」とともに、2011年度からの出版に向けて、2010年度の作業はほぼ順調に予定を達成することが出来た。

テーマ研究

- ① 日本における中国古典演劇の受容と研究
岡崎由美(早稲田大学文学学術院/教授)
- ② 台本による歌舞伎作品復元の調査研究
古井戸秀夫(東京大学大学院人文社会系研究科/教授)
- ③ 舞台芸術 創造とその環境 日本/世界
藤井慎太郎(早稲田大学文学学術院/教授)
- ④ 演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用
入江良郎(国立近代美術館フィルムセンター事業推進室/主任研究員)
- ⑤ 日本映画、その史的社会的諸相の研究
岩本憲児(日本大学芸術学部/教授)
- ⑥ 演劇研究基盤整備:舞台芸術文献の翻訳と公開
秋葉裕一(早稲田大学理工学術院/教授)
- ⑦ 能・昆劇の比較研究—日中伝統演劇の現在と未来
佐藤信(座・高円寺/芸術監督)
- ⑧ 伎楽面の総合的研究及び復元模刻制作
藪内佐斗司(東京藝術大学大学院/教授)

公募研究

- ① 20世紀前半期における日本の記録映画受容全史
奥村賢(いわき明星大学人文学部表現文化学科/教授)
- ② 坪内逍遙遺文の網羅的収集調査と紹介に関する研究
松山薫(早稲田大学図書館/職員)
- ③ 日本映画における〈国家〉の表象と文化的〈公共性〉の構築に関する学際的研究
山本佐恵(日本大学芸術学部/非常勤講師)
- ④ 明治・大正期の歌舞伎興行と狂言作者の周辺についての研究
神田由築(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科/准教授)
- ⑤ 帝政期ロシア映画関連資料の多角的調査
大傍正規(早稲田大学演劇博物館グローバルCOE/助手)
- ⑥ 河竹黙阿弥の作品研究
岩井眞實(福岡女学院大学・人文学部表現学科/教授)
- ⑦ 戦後映像文化史におけるオルタナティブの実践についての実証的研究—幻灯/スライドメディアの再評価及び映画・演劇界との連携の実態の検証を中心に—
鷲谷花(早稲田大学文学学術院/非常勤講師)
- ⑧ 近代日露演劇交流とその文脈
上田洋子(早稲田大学文学学術院/非常勤講師)
- ⑨ 「鴻池幸武・武智鉄二関係資料」の公開に向けた研究・調査
児玉竜一(早稲田大学文学学術院/教授)
- ⑩ 無声映画のフィルムとテキストの対照にもとづく相互的同意研究
上田学(早稲田大学演劇博物館/助手)
- ⑪ 日本における近代音源資料アーカイブ—蠟管以降の特殊音源を中心として—
飯島満(東京文化財研究所無形文化遺産部音声映像記録研究室/室長)

平成23(2011)年度のテーマ研究・公募研究の成果については、次号のニューズレターにて報告します。

〇お知らせ

- ・早稲田大学演劇映像学連携研究拠点では毎年11月～1月頃、共同研究課題の公募を行っております。詳細については公式ホームページをご覧ください。
- ・平成23年11月30日、逍遙協会理事の林京平先生(平成22年度公募研究12「坪内逍遙遺文の収集調査に基づく『坪内逍遙新集』(仮称)の刊行」研究分担者)が逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

演劇映像学連携研究拠点ニューズレター2号

2012年2月

編集:土居伸彰、堀切克洋

発行者:文部科学省「特色ある共同拠点の整備の推進事業」

による早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇映像学連携研究拠点

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学早稲田キャンパス6号館221教室

TEL:03-5286-8515

URL: <http://kyodo.enpaku.waseda.ac.jp/>